

小説「草枕」

Consultant 会誌編集専門委員会



■写真1—新潮文庫版「草枕」

山路を登りながら、こう考えた。智に働けば角が立つ。情に棹させば流される。意地を通せば窮屈だ。とかくに人の世は住みにくい。住みにくさが高じると、安い所へ引き越したくなる。どこへ越しても住みにくいと悟った時、詩が生れて、画が出来る。

との書き出しで始まる夏目漱石の『草枕』。この書き出し部分を語っている方も多であろう。明治39年(1906年)9月発行の『新小説』で発表された漱石39歳、約100年前の作品である。発売後すぐに売り切れたベストセラーのようである。

明治30年、熊本の第五高等学校教授であった漱石は同僚と二人で、現在の玉名市天水町小天となる前田家別邸を訪れ数日間宿泊した。この旅を題材に発表した小説が『草枕』である。文中、前田家別邸は「那古井の宿」、前田家は「志保田家」、前田家の次女草が「那美さん」として書かれている。

また、季節は春としか書かれていないが、日露戦争への出征の話が出て来る。日露戦争は明治37年2月から翌年の8月までであることから、明治37年もしくは明治38年の4月頃の設定と思われる。しかし小説では、戦時中という雰囲気はほとんど感じられない。

東京から来た画家である主人公の「余」は、画を描くために那古井の宿に滞在する。そこでちょっと変わった女性「那美さん」と知り合う。那美さんは宿の主の娘でバツイチである。数日滞在する内に、那美さんやその知人たちとの親睦は深まって行くが、いつまでたっても肝心な画が描けない。その間、西欧文学などが語られるが、このうんちくが非常に難解である。ある時、那美さんから自身の画を描いて欲しいと頼まれる。しかし画となると、何か一つ表情の物足なさを感じる。そんな折、那美さんの従弟の出征の見送りに立ち会うことになる。列車が動き始めると突然、車窓から零落した那美さんの別れた亭主が顔を出す。それに驚いた那美さんが、今までに無い表情をしていることに気が付く。

「それだ！ それだ！ それが出れば画になりますよ」と余は那美さんの肩を叩きながら小声で云った。余が胸中の画面はこの咄嗟の際に成就したのである。

1—山路

現在「草枕ハイキングコース」と呼ばれている道の大部分が、当時の熊本と高瀬(現在の玉名市)を結ぶ山越えの幹線道路だったと言われている。野出と呼ばれる地域の近くには、当時の面影を残す石畳道が現存している。散策するファンには最も人気が高い場所らしい。



■写真2—「山路を登りながら、こう考えた」



■写真3—小説の峠の茶屋をイメージして復元された「鳥越の茶屋」



■写真4—「野出の茶屋」跡展望台からの眺め。遠く雲仙普賢岳が望める



■写真5—漱石も滞在した「前田家別邸」の内部

2—峠の茶屋

『草枕』には峠の茶屋は1軒しか出て来ないが、実際には「鳥越の茶屋」と「野出の茶屋」の2軒があったと言われている。

現在でも井戸跡が残る竹林の中にあった鳥越の茶屋は昭和10年(1935年)頃に解体され、平成元年に今の茶屋が復元された。中は漱石の資料館になっていて、昔の茶屋の写真などがある。

野出の茶屋跡は、みかん園の中に碑と展望台がある。展望台からは、漱石も見たであろう有明海と雲仙普賢岳が望める。



■写真6—漱石も入浴した「洗い場と湯槽」

3—那古井の宿

小天温泉には数軒の宿があり、前田案山子の別邸もその一つであった。『草枕』の中で「志保田の隠居」として書かれている案山子は、自由民権運動の闘士として活躍した人物である。

別邸は中庭を囲むように本館、浴場、離れと母屋が回廊や渡り廊下で結ばれていた。離れの一部は無くなり母屋は建て替えられているが、漱石が宿泊した離れの6畳間と浴場が現存している。離れの6畳間は昭和61年に修復し、浴場は平成16年に半地下の洗い場と湯槽を当時のままに保存し、上屋だけが復元された。

また、小説に登場する「鏡が池」のモデルは諸説あるようだが、別邸に隣接してあった前田家第二別邸の池がモデルとも言われている。

(文章 塚本敏行)



■写真7—「鏡が池」のモデルとも言われる池

- <参考文献>
 1)『草枕』夏目漱石 昭和45年11月 新潮文庫
 2)『草枕の旅』誌本 熊本県玉名市草枕交流館
 3)熊本県玉名市「漱石・草枕の里」ホームページ(<http://www.kusamakura.jp/>)

- <取材協力・資料提供>
 1)熊本県玉名市草枕交流館

- <写真提供>
 写真1、5 塚本敏行
 写真2 市場嘉輝
 写真3、4 遠藤徹也
 写真6、7 藤井千晶